

ひたちなか 埋文だより

38



両極打法で石器を作る

今日は、河原で石器作りをします。まず、安定した大きな石を台にしましょう。ナタのように振るえる握りやすい石がハンマーになります。道具がそろったら、石器の材料となる扁平な石をさがしてください。円または楕円形の石が礫石錘、長めの石は打製石斧の材料になります。全ての準備が整ったら、台に石を立てて、その上の縁をハンマーで敲きましょう。…だから、石の置き方は、横ではなく縦、立てる。聞いてますか？

(2012.10.13 ふるさと考古学⑧石の考古学)

CONTENTS

第10回企画展 旅する「十王台式」／公開講座「ひたちなか市の考古学」第6回

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第10回 勝田市の遺跡の調査(3) (川崎純徳)

資料紹介 縄文時代後期の宮前貝塚から出土したカワシンジュガイ (黒住耐二)

展示資料紹介 奈良・平安時代の魚網錘—ひたちなか市出土土錘の類型について— (佐々木義則)

ひたちなか市内の発掘調査 2012

横穴墓を歩く⑨ 中田横穴墓 (櫻村友延)

1ケース・ミュージアム 25 古墳時代の色

1ケース・ミュージアム 26 鷹ノ巣遺跡発掘調査速報展

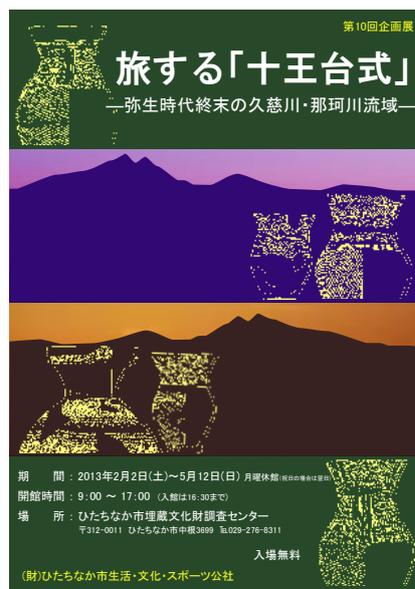
ひたちなか市の古墳① 川子塚古墳と磯崎東古墳群

歴史の小窓⑩ ただの石?—敲石

ほか

旅する「十王台式」

— 弥生時代終末の久慈川・那珂川流域 —

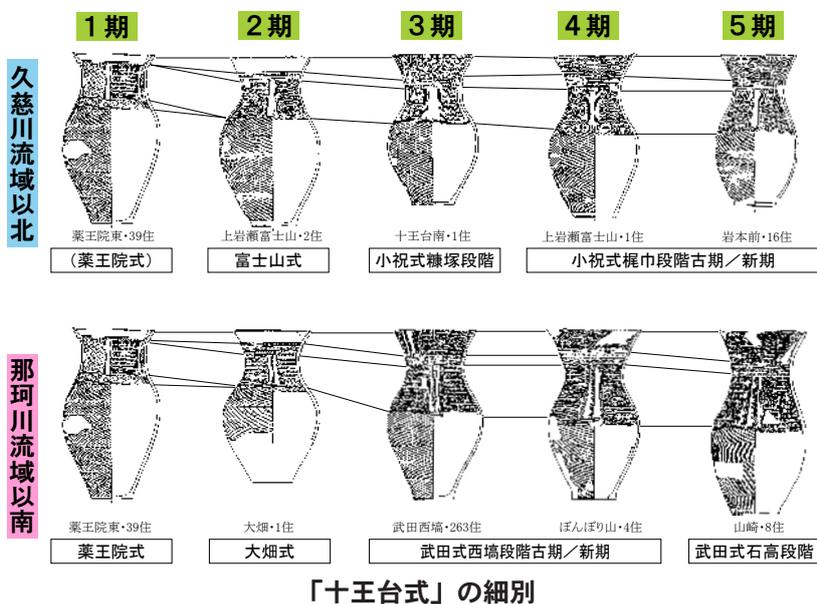


第 10 回企画展

2013年2月2日(土)～5月12日(日)

「十王台式」という土器群 「十王台式」とは、弥生時代後期後半という時期、茨城県の北部を中心とした地域に分布する土器群の名称です。土器の上半分には櫛描文が、下半分には縄文が付けられていて、隙間をあげて縦に区画される櫛描文と、付加条第二種を用いる縄文に特徴があります。この個性を見極めることにより、破片であっても、他の土器群とは区別ができるようになるのです。他の土器群が伴うということは、それらが同じ時期のものであることの証です。区別されたのは、異なる地域が関係しているのではないかと、考えを進めることとなります。

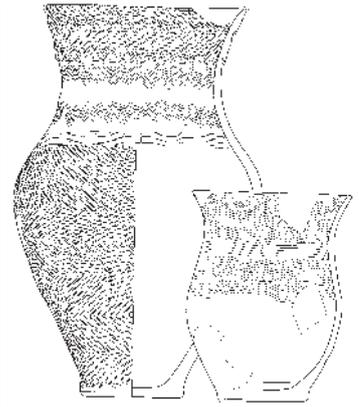
ひたちなか地域の「十王台式」 ひたちなか市域では区画整理事業に伴い、武田・船窪という二つの遺跡群で「十王台式」の集落跡が調査されました。土器群を分析してみると、「十王台式」の時期は一〜五期と表記した五つに、地域は久慈川流域以北と那珂川流域以南という二つ（*）に細別されることが考えられました。武田・船窪遺跡群は、「十王台式」でも三〜五期に形成された集落跡ということになります。また、那珂川流域の遺跡群でありながら、久慈川流域以北の土器群が多量に持ち込まれていることも捉えられました。久慈川流域の遺跡にも那珂川流域の土器群が多量に運ばれているのなら、相互的な交渉ということになるでしょうが、実際は、そうではありません。一方的な交渉に見える、この現象の謎が今回の展示を企画する動機となりました。



* 鈴木素行 2012 「小祝式」と「武田式」、それぞれの紡錘車『ひたちなか埋文だより』第36号 参照



群馬県域「樽式」へ向かう旅は
筑波山を東に眺めながらの陸路



左：「二軒屋式」の煮沸具
(大畑・11住)
右：「樽式」の煮沸具
(矢倉・19住)

大戸遺跡群の土器

「十王台式」、西へ 「十王台式」は、本来の分布を離れて他県域からも発見されています。その一つが、群馬県域の「樽式」を目指す西への経路として復元されました。渋川市の有馬遺跡や高崎市の日高遺跡など、いくつもの遺跡に「十王台式」が報告されています。この「樽式」の地域までには、栃木県域を通ります。宇都宮市の二軒屋遺跡などでは、「二軒屋式」に「十王台式」が伴い、互いの特徴を融合させた土器も製作されていて、「十王台式」との交渉が緊密であったことを窺わせています。茨城町の大戸遺跡群は、「十王台式」の二・五期に形成された拠点的な集落跡です。この土器群には、「二軒屋式」が伴い、互いの特徴を融合させた土器も製作されていました。「二軒屋式」から「樽式」への交渉は、大戸遺跡群の集落が掌握していたのではないのでしょうか。「樽式」への経路は、陸路であり、群馬県域の「十王台式」のほとんどが煮沸具であるのは、道中に携帯した炊事具と考えられます。大戸遺跡群からは、持ち帰ったとも想像される「樽式」の煮沸具が報告されています。この大戸遺跡群の「十王台式」にも、久慈川流域以北の土器群が少なからず持ち込まれているのです。

「十王台式」、南へ もう一つが、千葉県域の「山田橋式」を目指す南への経路として復元されました。東京湾岸の地域では、千葉市の村田服部遺跡と市原市の南中台遺跡が知られています。茨城県南部、霞ヶ浦にほど近い土浦市の原田遺跡群では、在地の土器群に「十王台式」が伴います。ここ



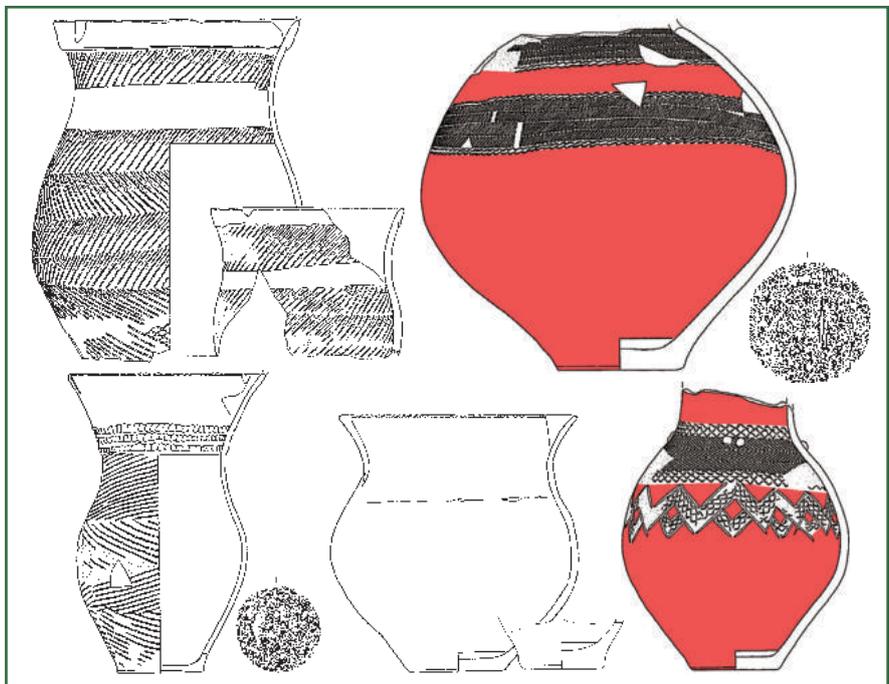
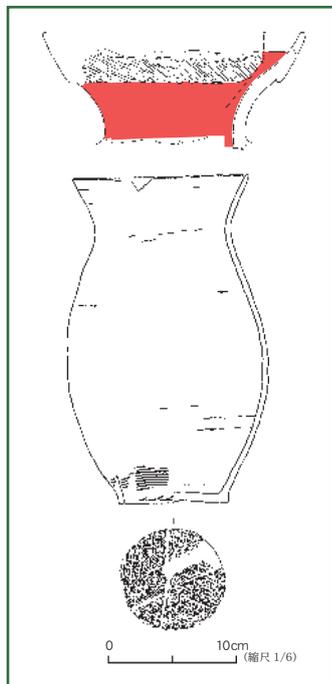
上：「山田橋式」
系統の貯蔵具
(西原・6住)
下：「根鹿北式」
の煮沸具
(根鹿北・19住)

原田遺跡群の土器



千葉県域「山田橋式」へ向かう旅は
筑波山を西に眺めながらの水路

*筑波山の写真は、飯島一生氏よりご提供いただきました。



古墳時代と「十王台式」の出会い（左：水戸市大塚新地遺跡2住，右：土浦市原田西遺跡11住）

から千葉領域までは、「香取の海」とも呼ばれた現在の霞ヶ浦・利根川に、船を利用した交通が考えられます。千葉領域に「十王台式」の大きな貯蔵具が目立つのも、交通手段の違いによるのでしょう。霞ヶ浦沿岸域から「山田橋式」への交渉にも、大戸遺跡群の集落は関与していました。さて、「香取の海」の始点には、もう一箇所、現在の北浦が考えられます。「十王台式」が分布し、拠点的な集落跡は大洗町の一本松遺跡にあります。武田・船窪遺跡群で見た現象は、久慈川流域以北の「十王台式」が北浦を経由し、南へと向かう動きの一部として理解できるのではないのでしょうか。

旅の成果 「十王台式」が西や南へ向かう旅の目的は、何だったのでしょうか。当時の外来の物を検討してみると、斧・刀子・鎌など鉄製の利器の入手が浮かび上がります。旅は、鉄器を豊富に所有する地域を目指したものでした。交換財として、貯蔵具には米が満たされていたかもしれません。西への旅が陸路であることからは、軽量の布を考えたくなります。「十王台式」の集落跡には、糸を紡ぐ土製の紡錘車が数多く報告されているのです。「十王台式」の四・五期に、千葉領域では古墳が出現します。これより、千葉領域から茨城県域への進出が始まります。「十王台式」と土師器が伴い、互いの特徴を融合させた土器も見られます。大きな争いなく新しい時代が到来する背景には、前段階の交渉で構築された関係があったことを考えるのです。

（鈴木素行）



土器に見る地域間の交渉（壁面）



威信財と鉄製の利器（平台）



分布と旅のルート（地図の間）

今回の企画展の開催及び本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。茨城町教育委員会・笠間市教育委員会・桜川市教育委員会・土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場・土浦市教育委員会・常陸太田市教育委員会・常陸大宮市教育委員会・常陸大宮市歴史民俗資料館・日立市教育委員会・日立市郷土博物館・水戸市教育委員会、渥美賢吾・飯島一生・猪狩俊哉・石井聖子・加藤 忠・川上晴雄・黒澤春彦・越田真太郎・西野 保（50音順・敬称略）

公開講座「ひたちなか市の考古学」第六回 — 弥生時代後期の北関東 —

二〇一三年の二月一日から三月三日までに、四回の講座を実施しました。今回の「弥生時代後期の北関東」は、第三回の「弥生時代の墓制と社会」の続編に相当します。茨城県域について発表するとともに、群馬県、栃木県の研究者をお招きして、それぞれの県域に見られる土器の特徴、復元される地域社会の姿をお話いただきました。最終回には南関東も含めた、古墳時代前夜の関東地方について総括していただきました。



講座終了後のギャラリートーク

月/日	演 題	講 師
2/2 (土)	群馬県域「樽式」の土器と社会	高崎市教育委員会 若狭 徹 氏
2/9 (土)	茨城県域「十王台式」の土器と社会	(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 鈴木 素行
2/23 (土)	栃木県域「二軒屋式」の土器と社会	しもつけ風土記の丘資料館 藤田 典夫 氏
3/3 (日)	弥生時代後期の関東地方	明治大学 石川日出志 氏



明治大学

石川日出志氏

「いずれにせよ西日本でつくられたものもたらされている。髭釜遺跡の銅鏃。青銅製の鏃が出てます。これは関東で作られているとはとても思えません。この小さな、わずか4cm 足らずの小さな青銅の鏃ですけれども、濃尾平野、あるいはそれ以西の遠隔地との交流を示す非常に重要なデータということですよ。」



しもつけ風土記の丘資料館

藤田 典夫氏

「弥生後期に明瞭にあらわれた東西の人もかもの活発な交流は、まさに、二千年後に開通し、私が関わった北関東自動車道と同じように東西の道というのはかなり重要なルートであるということを示していることですね。特に栃木は、両側の真ん中にありますので、非常に両側の文化、物というものが、余計にあらわれているのではないかと実感するわけです。」



高崎市教育委員会

若狭 徹氏

「ここ最近の発掘考古学の成果をみると、朝鮮半島から入ってきたものが、日本海側を流れてくるというルートがあったらしいということがわかってきました。日本海側をきて、信濃川の河口から上がって、吾妻川を渡って群馬に入る。そして、この群馬の樽式文化の連中を媒介しながら荒川ルートを通じて南の方に鉄を中継する。そういうふうな役割を果たしている可能性が考えられる。」

歴史の小窓 その一〇

ただの石？— 敲石

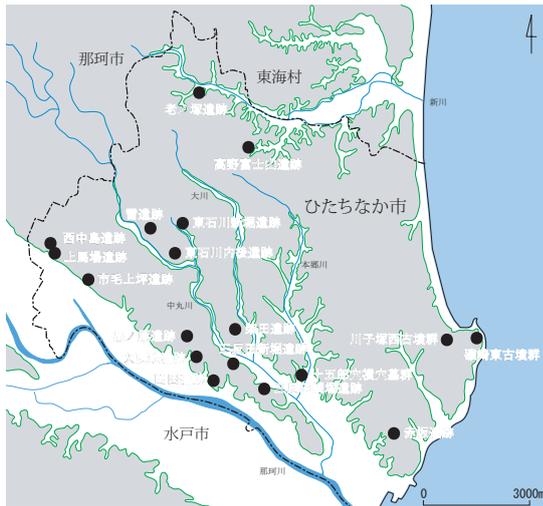
古代の住居跡を発掘すると握りこぶし大の石が出土することがあります。ただの石？。きれいに洗って観察してみると、滑らかな表面の一部に、なにかに叩きつけられてきたような荒れた面（使用痕）があり、敲石であることがわかります。写真は、七世紀後半の武田原前遺跡二八号住居跡から出土した敲石です。敲石は縄文時代ではおなじみですが、じつは奈良・平安時代にも出土する石器なのです。



敲石の研究を参考にする
と、平坦面に

使用痕がある敲石は木の実の殻を割るのに使われ、側面に使用痕がある敲石は木の実をつぶすのに使われた可能性があります。写真の敲石は、平坦面と側面の両方に使用痕をもっていますので、両方の使い方をされた石器であったのかもしれない。
(佐々木義則)

参考文献 志田諄一・鈴木素行・松谷暁子「一九九八「金井戸のドングリ」— 十王台式土器とともに検出された炭化種子」『婆良岐考古』第二〇号 婆良岐考古同人会



二〇一二(平成二四)年度のひたちなか市内における発掘調査は、市内遺跡調査のほか、十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査がありました。

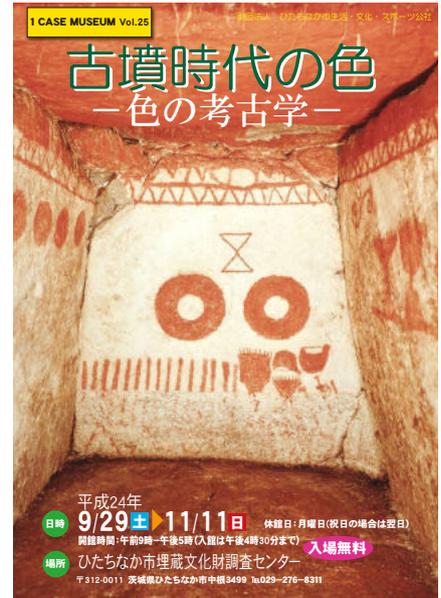
市内遺跡調査では、三反田蜷塚遺跡で古墳時代後期の大型住居跡が調査されました。また、磯崎東古墳群の確認調査では、小型の石室が確認され、周囲を方形に巡ると推測される浅い周溝が確認されました。

十五郎穴横穴墓群では、館出南支群の範囲確認調査によって、今まで知られていなかった多くの横穴墓の存在が確認され、今後の研究にとって貴重な成果となりました。(佐々木義則)

2012(平成24)年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	月	種別	調査内容
1	おかだ 岡田遺跡	20 次	三反田	4 月	試掘	住居跡 1 基(時期不明)を確認。弥生土器・土師器・須恵器・陶器が出土。
2	おかだ 岡田遺跡	21 次	三反田	4 月	試掘	住居跡 2 基(古墳後期 1, 時期不明 1), 溝跡 1 条(時期不明)を確認。土師器・須恵器が出土。
3	おかだ 岡田遺跡	22 次	三反田	6 月	試掘	土坑 2 基(時期不明)を確認。旧石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・近世陶器が出土。
4	あかさか 赤坂遺跡	1 次	赤坂	7 月	試掘	遺構・遺物なし。
5	みたんだしんぼり 三反田新堀遺跡	17 次	三反田	7 月	試掘	溝跡 2 条(中世後期 1, 時期不明 1), 土坑 1 基(時期不明)を確認。中世土器が出土。
6	ひがししかわしんぼり 東石川新堀遺跡	3 次	東石川	8 月	試掘	遺構・遺物なし。
7	かごづかにし 川子塚西古墳群	2 次	磯崎	8 月	試掘	遺構・遺物なし。
8	にしなかしま 西中島遺跡	3 次	津田	9 月	試掘	住居跡 2 基(奈良 1, 平安 1)を確認。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器が出土。
9	かみばば 上馬場遺跡	3 次	津田	9 月	試掘	住居跡 3 基(奈良 1, 時期不明 2), 土坑 4 基(時期不明)を確認。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・近代瓦・磁器が出土。
10	かみばば 上馬場遺跡	4 次	津田	9 月	試掘	住居跡 1 基(平安), 溝 3 条(時期不明), 炭窯 1 基(近代)を確認。土師器・須恵器・近代瓦・磁器が出土。
11	ひがししかわうちご 東石川内後遺跡	2 次	東大島	9 月	試掘	遺構・遺物なし。
12	おおぼろち 大房地遺跡	17 次	金上	10 月	試掘	溝跡 4 条(時期不明), 土坑 1 基(縄文後期), ピット 5 基(近世 1)を確認。縄文土器・近世陶器が出土。
13	はたのほら 畠ノ原遺跡	3 次	金上	11 月	試掘	遺構なし。旧石器が出土。
14	ひがししかわしんぼり 東石川新堀遺跡	4 次	東石川	11 月	試掘	遺構・遺物なし。
15	いちげかみつぼ 市毛上坪遺跡	12 次	市毛	11 月	試掘	住居跡 14 基(古墳時代), ピット 2 基(時期不明)を確認。土師器・須恵器・礫が出土。
16	ひがししかわうちご 東石川内後遺跡	3 次	東大島	11 月	試掘	遺構・遺物なし。
17	おかだ 岡田遺跡	23 次	三反田	12 月	試掘	住居跡 6 基(奈良・平安 4, 時期不明 2), 土坑 2 基(時期不明), ピット 4 基(時期不明)を確認。土師器・須恵器が出土。
18	みたんだしんぼり 三反田蜷塚遺跡	4 次	三反田	12 月	試掘	住居跡 2 基(時期不明), 溝跡 1 条(時期不明)を確認。縄文土器・土師器・須恵器・近世陶器が出土。
19	みたんだしんぼり 三反田蜷塚遺跡	5 次	三反田	12 月	試掘	住居跡 1 基(時期不明), 土坑 1 基(時期不明)を確認。遺物なし。
20	いそぎひがし 磯崎東古墳群	10 次	磯崎	1 月	試掘	古墳 1 基, 溝 2 条(時期不明), 土坑 1 基(時期不明)を確認。遺物なし。
21	おいのづか 老ノ塚遺跡	2 次	稲田	1 月	試掘	遺構・遺物なし。
22	みたんだしんぼり 三反田蜷塚遺跡	6 次	三反田	2 月	本調査	住居跡 3 基(弥生後期 1, 古墳後期 2), 土坑 5 基(近世 2, 時期不明 3), ピット 44 基(時期不明)を確認。縄文土器・弥生土器・土師器・白玉・近世陶磁器・煙管等が出土。
23	しばた 柴田遺跡	3 次	中根	2 月	試掘	住居跡 3 基(縄文後期 3), ピット 9 基(縄文後期 3, 時期不明 6), 土坑 1 基を確認。縄文土器・石器が出土。
24	いかづち 雷遺跡	1 次	東石川	2 月	試掘	住居跡 2 基(古墳時代), ピット 4 基(時期不明), 溝 2 条(時期不明)を確認。縄文土器・土師器が出土。
25	こうやふじやま 高野富士山遺跡	7 次	高野	3 月	試掘	ピット 1 基(時期不明)を確認。遺物なし。
26	おかだ 岡田遺跡	24 次	三反田	3 月	試掘	住居跡 1 基(奈良・平安)を確認。縄文土器・土師器・須恵器が出土。

* 市内遺跡調査については、『平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』が市内図書館等で閲覧できます。



「古墳時代の色」でひたちなか市といえば、真っ先に虎塚古墳が挙げられます。しかし、虎塚古墳のように石室にみられる色は非常に特殊なもので、一般的なものは土器や埴輪などに塗られたものでしょう。そこでこの展示では、古墳時代にはどのようなものに、どのような色がみられるのかを紹介しました。

装飾古墳の色 装飾古墳とは、虎塚古墳のように石室などに丸や三角形といった幾何学文様や武器などが描かれた古墳です。茨城県内には一八基の装飾古墳が確認されています。これらの古墳にみられる色は、赤・白・黒の三色です。顔料は、赤がベンガラ（酸化第二鉄）、白が白土、黒が黒土または炭です。茨城県以外の装飾古墳では、この他に黄・緑・灰の三色があり、六色全てが使われているものは、福岡県桂川町にある王塚古墳のみです。

石棺の色 大型品収蔵庫に展示している鈍ノ

宮古墳群から出土した石棺の内側には、赤色がみられます。これもベンガラによって塗られています。このように、絵ではなく石室や石棺が塗られている例は数多くみられます。また、このような例では、ベンガラではなく、「水銀朱」が使われる例もあります。

土器の色 土器には、古くは縄文時代からすでに赤色が塗られています。古墳時代では、真っ赤に塗られた壺や十文字状に塗られた杯などがあります。これらの色が塗られた土器は、日常製品とは違い、古墳にお供えしたり、マツリで使用したりする「特別な土器」の可能性がります。

埴輪の色 土器と同じように、埴輪にも主に赤色がみられます。人物埴輪の顔にみられる赤色は、当時の人々の化粧を表すものかもしれま



赤彩された古墳時代の杯（右）と青色顔料がみられる田彦古墳群出土の武人埴輪（左）

せん。また、色によって衣服や甲冑を表現したものもみられます。久慈川下流域を中心とした地域には、赤色以外に灰（青）色があります。灰色は主に武器・武具に多くみられ、この地域の埴輪の特徴となります。

顔料 遺跡からは、顔料そのものが出土する例があります。ひたちなか市鷹ノ巣遺跡第五三号住居跡からは、小さな壺にベンガラが入った状態で出土しました。この他にも武田西埴遺跡第二八〇号住居跡や東海村下ノ諏訪南遺跡第二三B号住居跡等でもベンガラが出土しています。

特別展示 今回の展示では、秋の虎塚古墳壁画公開期間に、虎塚古墳の奥壁の一部を初公開しました。この資料は、一九七三年の石室調査の際に床面に落ちていた、長辺が一五cmほどの石片です。石の一部には、文様の一部の赤色顔料がみられます。資料保存のため、これまで収蔵庫に保管

されていましたが、今回近で虎塚古墳の色を見ていただくために特別に展示しました。

（稲田健一）

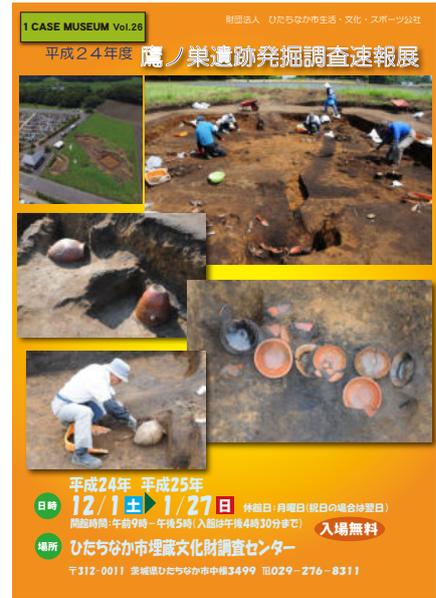


虎塚古墳奥壁の一部

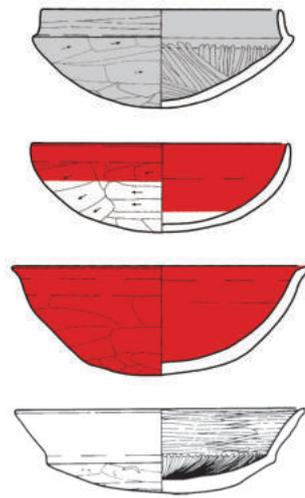
二〇一二年年度の鷹ノ巣遺跡の発掘調査の成果については、前号の『埋文だより』第三七号で速報としてご紹介しました。今回の展示は、その成果の一部として、古墳時代後期の第二八号住居跡から出土した遺物を展示しました。

第二八号住居跡からは、甕・甔・壺・高杯・杯・手づくね土器といったいろいろな形の土器が出土しました。中でも、杯は完形のものも十点以上出土しています。

これらの杯を見ると、形や色にバリエーションがあることが判ります。形では、器の上の部分（口縁部）に注目して下さい。外側に大きく開くものや直立するもの、内側に傾くもの、中間に段をもつものなどを観察できます。色は、ベンガラが塗られて赤いもの、漆を塗られたと思われる黒いもの、何も塗られていないものがあります。さらに、内側に放射状に細い線（ミガキ）がみられるものもあります。



展示のようす



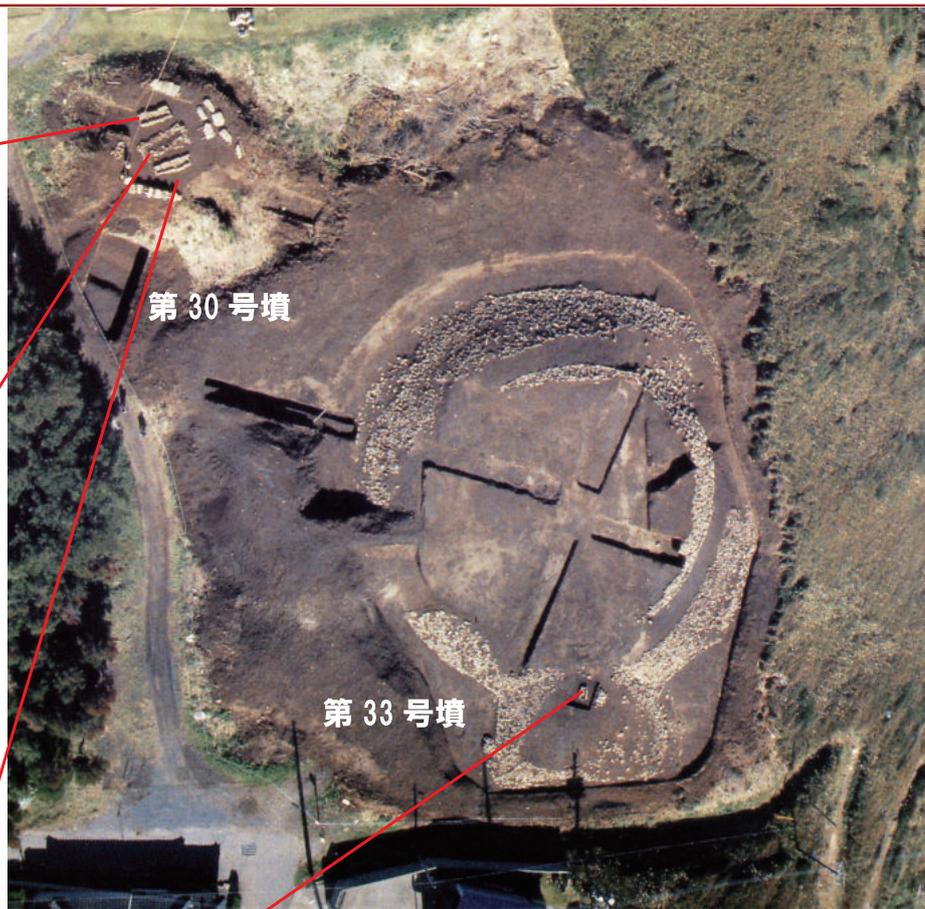
いろいろな杯

これらの杯は、住居の床面から出土していることから、当住居で使用されていたものと考えられます。よって、当時の人々が、いろいろな形の杯を使っていたことが判ります。

(稲田健一)



礫石錘の用途 (2013.2.15)



1989年に調査が行われた第30号墳と第33号墳



2011年に調査した崖面に露出した石室の平面(上)と断面(下)写真



2012年に磯崎小学校の校庭でみつかった円墳の石室

見学ガイド

- * 川子塚古墳は、市の指定史跡として説明板などが整備されており、自由に見学することが可能です。
- * 磯崎東古墳群は、説明板などは設置されていませんが、酒列磯前神社やホテルニュー白亜紀周辺のものを道路から見ることはできます。一部、立入が禁止されている場所もあります。
- * 古墳から出土した遺物の一部は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しております。

論製作遺跡の窯で最初に焼かれ
に立てるための埴輪と考えられて

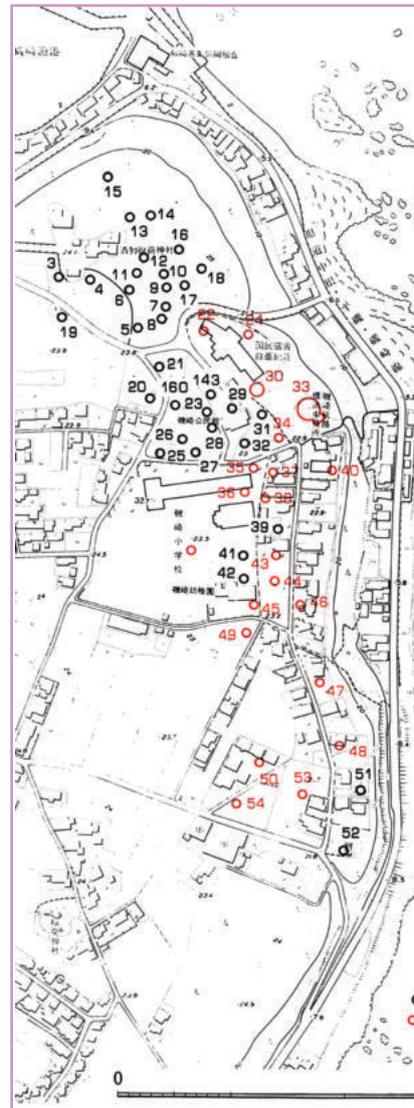
ひたちなか市の古墳

1 川子塚古墳と磯崎東古墳群

川子塚古墳は阿字ヶ浦海水浴場の南側の台地上に位置しています。古墳の形は前方後円墳で、規模は全長約81m、高さ約9mを測ります。この規模は、市内最大となります。発掘調査は実施されていませんが、墳丘にはたくさんの石が敷かれており、人物埴輪や円筒埴輪が見つっています。それらの遺物から、古墳の時期は5世紀後半と推定されます。

磯崎東古墳群は、川子塚古墳の東、磯崎小学校の周辺に位置しています。古墳の数は、消滅したものも多く正確な数は判りませんが、1950年の調査では54基の古墳が確認されています。群を構成する古墳は、直径約20mの円墳が主体で、第33号墓のみが全長40mの帆立貝形古墳です。この古墳は、川子塚古墳と同じく石が敷かれていました。1989年に調査された第30号墓では、3つの石室が並んだ状態で検出され、その中からは、鏡や大刀、鉄鏃、骨鏃、刀子などのたくさんの遺物が出土しました。2011年には、海岸を臨む崖の一部が崩れて、石室が出現しました。石室の中には、壮年の女性1体が埋葬されていました。2012年には、磯崎小学校の校庭を調査し、直径約15mの円墳と小型の横穴式石室4基を確認しました。円墳の埋葬施設は横穴式石室で、天井石は失われていましたが、入口が閉塞されている状態を確認することができました。石室からは、人骨や勾玉などが出土しています。

古墳の時期は、5世紀後半から7世紀中頃までであることが判っており、市内でもっとも長い期間、古墳が造られていた古墳群と考えられます。



磯崎東古墳群の分布



川子塚古墳



川子塚古墳の墳丘（手前が前方部）



川子塚古墳平面図



ミニ知識
市内にあります馬渡埴輪た埴輪は、川子塚古墳にいます。

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

勝田市史編纂にあたって、いくつかの基本原則が「原始古代部長」の大塚初重先生から提起された。それは今日まで出土した勝田市域の考古資料については可能な限り^{しやうりよう}渉猟し、資料化して置くという事、また発掘調査は最小限市史編纂のために必要なものに限定して実施するという事で、東中根遺跡と虎塚古墳^{とらづか}の調査が提示された。この二遺跡とも土地所有者は中根の西野茂信さんであった。

東中根遺跡は筆者が、虎塚古墳は大塚先生が担当することになった。調査は東中根遺跡、虎塚古墳とも一九七二（昭和四六）年から調査に入るようになっていた。当時は学生運動が活発であり、考古学関係の調査についても調査阻止が叫ばれていた。勝田市史関係の二遺跡についても例外ではなかった。筆者の元へも学生運動からピラが送り付けられてきたり、面会の要請もあった。大塚先生のご苦勞は大変なものであったであろうと推測できるのである。東中根遺跡は一九七二年夏に調査に入ったが、虎塚古墳については一九七一年度は測量調査のみで発掘調査に入れたのは一九七三（昭和四八）年からであった。しかし、その後の流れはスムーズであり、調査は一九七三年に彩色壁画が発見され、同年一月には国史跡指定答申と異例の速さで進んで行った。

大塚先生の調査には学ぶべき大きな特徴がある。馬渡埴輪製作遺跡^{まわたりに}の調査でも、常に見学者・

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第10回 勝田市の遺跡の調査(3) —虎塚古墳—



1973（昭和48）年8月20日 虎塚古墳第1次調査の慰霊祭
（左から川崎、小林三郎氏、大塚初重先生 宮司は井上義氏）



川崎 純徳

市民を意識し、懇切丁寧な説明を心がけておられたことである。虎塚古墳の調査に際しても原田道雄さんを中心にして「青空考古学教室」が連日開かれ、リアルタイムでの石室内部の調査状況など市民にわかりやすい解説が行われ、多くの見学者から高く評価されたのである。

今回の調査の大きな特徴は、調査の早い段階から保存科学の分野の研究者の参加があったことである。前年に発見された奈良県高松塚古墳^{たかまつか}の彩色壁画の保存のために未開口古墳の内部の状態を科学的に知るための調査が並行して進められた。調査は発掘調査団、東京国立文化財研究所の研究員との連携作業によって行われたが、市長をはじめとした勝田市役所関係者、多くの市民の協力体制がいつの間にか出来上がっていた。こうした連携の輪が史跡指定へと突き進んでいったのである。ここに埋蔵文化財保存と活用の本来の姿があると言わなければならない。保存と活用はともすれば矛盾しかねない。しかし、大塚先生の方針は最初から保存と活用の両立で一貫していた。この方針に基づいて公開施設が誕生した。一九七八（昭和五三）年に虎塚古墳の報告書が刊行された。虎塚に関するエピソードは関係者によって何度となく語られてきたので、ここでは触れない。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一回
『埋文だより』第二九号に掲載してあります。

縄文時代後期の宮前貝塚から出土したカワシンジュガイ

黒住 耐二



カワシンジュガイ (1/2: 福島県浪江町産)

ひたちなか市の縄文時代後期の宮前貝塚から、小さな破片でしたが淡水二枚貝のカワシンジュガイを確認しました。現在は茨城県中南部には生息していない種で、関東地方の貝塚からもまず出土しません。食用ではなく、貝殻が遺跡に持ち込まれた可能性や、何か変わった使い方をされたのではないかと、様々なことを考えさせてくれました。正確に名前を調べることによって、貝塚の貝は、まだまだ面白いことを教えてくれるはずですよ。

カワシンジュガイは、北方の河川にすむ大きな個体では殻長が10cm以上にもなる淡水二枚貝である。現在の分布は、北海道・東北地方の比較的多くの河川、中部・関東以西の本州では広島県まで点々と生息地が知られており、主に日本海側に注ぐ河川で見られる「増田一九九四」。茨城県では、北部の阿武隈山地等から僅かに知られているにすぎない「稲葉一九九六」。

今回、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに所蔵されている藤本彌城先史資料中の宮前貝塚の貝類遺体中にカワシンジュガイを確認できた。このカワシンジュガイについて簡単に紹介し、その持つ意義にも触れたい。宮前貝塚は、海岸線から3km程度内陸の標高約28mに位置する縄文時代後期の遺跡である。この貝塚からは、ヤマトシジミを優占種として、ハマグリ・クボガイが次ぎ、マツカサガイ6（左右殻数）とカワニナ2の淡水産貝類も含む29種の貝類が報告されている「藤本一九七七」。カワシンジュガイはマツカサガイ中の1個体と思われる。

1 宮前貝塚のカワシンジュガイ

今回確認できた淡水二枚貝類の外側を図1右に示した。上段の2個体は、殻の後部に剥離が認められるもの、およそ全体が残っており、表面に松傘のようなシワ状の彫刻が明らかである。ライターの幅が23mmなので、左の個体（左殻）の残存長は29.8mm、右の個体（右殻）は33.2mm、約3cm程度のやや小形の個体である。従来、関



図1 宮前貝塚の淡水二枚貝類 (右: 外側 左: 内面)

東地方で殻の表面にシワ状の彫刻を持ちマツカサガイとして知られていたものは、マツカサガイとヨコハマシジラの2種に識別されるようになった「近藤二〇一〇」。宮前貝塚の標本は、殻が前後にやや長く、腹縁が背部と平行的であり、彫刻がやや弱いことから、ヨコハマシジラの可能性が高い。ただ、以下では、両種を合わせてマツカサガイ類と表記する。

下段の1個体は、殻表が剥離しており、外側の写真では同定は不可能であるが、上段のようなシワ状彫刻は認められない。剥離部に真珠光沢を有し、殻が厚いことから、淡水産二枚貝と判断できる。

これらの内面を示したのが、図1左である。上段のマツカサガイ類と比較して、下段の個体は咬み合わせの歯の部分が大きなことがわか

る。さらに詳細に検討すると擬主歯が縦に位置し、突出部の間の窪み(→)が広いという特徴が認められる(図2)。殻表が平滑である可能性の高いことと歯の形態から、下段の種はカワシンジュガイの左殻に同定でき、歯の大きさは約6cm程度の個体であったと推測される。

2 カワシンジュガイの由来

この種は北方系の種で氷期遺存種とされことも多いが、最終氷期最寒冷期には東京の平野部から化石が産出しており、本種の減少要因は人間による自然環境の改変であるとの指摘もあり「近藤一九九五」、現在は分布していない宮前遺跡周辺にも本種が生息していた可能性もある。宮前貝塚のカワシンジュガイは、①遺跡周辺で採集された、②当時の人の行動圏内で得られた、③殻だけ持ち込まれたと様々な由来が想定される。筆者は僅かな出土数から、食用であったとは考えにくく、何らかの貝殻利用のため、遺跡へ持ち込まれたものと考えている。

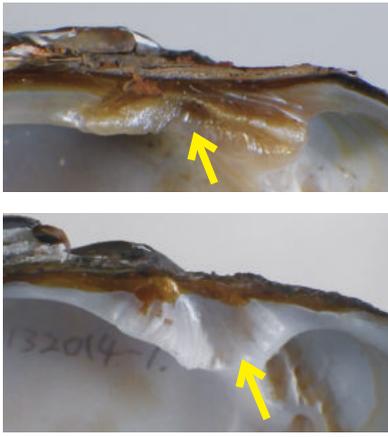


図2 現生二枚貝類の歯
(上:ヨコハマシジラ
下:カワシンジュガイ)

3 カワシンジュガイの殻利用

本種の加工品は縄文時代後・晩期の東京都北区西ヶ原貝塚から出土している(図3・金子一九八六)。腹縁部を利用し、研磨され、真珠光沢を有するものとされる。また、長野県高山村の湯倉洞窟(弥生時代)から本種の板状の切断品も知られている「金子二〇〇一」。カワシンジュガイの多く生息する北海道では、アイヌの人々によってナイフや穿孔した穂摘具(ヒパ)として、本種が利用されているという。

4 先史遺跡出土の淡水二枚貝

真珠光沢を持つが、カワシンジュガイ・マツカサガイ類等の製品の報告例はかなり少ない「忍澤二〇一一」。しかし、これまでに見させて頂いた日本各地の縄文貝塚からは、研磨のある淡水二枚貝片を複数例確認している。図1のようにマツカサガイ類では後部に剥離のある例も多い。明瞭な研磨や剥離がなく、「製品」ではないかもしれないが、後部の消失は何らかの利用による結果ではないかと想像しており、今回のカワシンジュガイも同様な可能性があろう。また少数例ではあるが、淡水真珠の報告もある(福井県鳥浜貝塚・千葉県井野長割遺跡等)。薄質の淡水二枚貝のドブガイ類を割って、特殊な土坑に「撒いた」とも考えている例もある「黒住二〇一一」。淡水二枚貝類では、定式化はしていないかもしれないが、その真珠光沢が選択された様々な製品としての多面的/特殊な利用や真

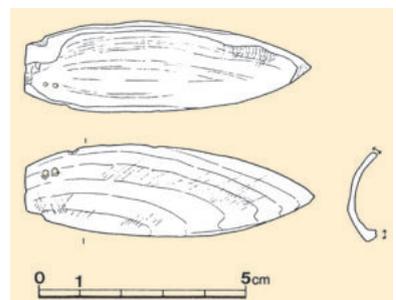


図3 西ヶ原貝塚のカワシンジュガイ製品(文献③より引用)

ている「忍澤二〇一一」も参照。今後、各地の遺跡で、出土淡水二枚貝が詳細に検討されることが望まれる。

報告に当たり、稲田健一・鈴木素行・忍澤成視の各氏にお世話になった。

参考文献

- ①藤本武一九七七「自然遺物」『那珂川下流の石器時代研究I』
- ②稲葉修一九九六「阿武隈山地のカワシンジュガイ」『茨城生物』一七茨城生物友の会
- ③金子浩昌一九八六「自然遺物」『北区西ヶ原貝塚』西ヶ原貝塚調査団
- ④金子浩昌二〇〇一「貝製品」『湯倉洞窟』長野県高山村教育委員会
- ⑤近藤高貴一九九五「カワシンジュガイは氷期依存種?」『ちりばたん』二五日本貝類学会
- ⑥近藤高貴二〇一〇「日本産イシガイ目貝類図譜」特別出版物三日本貝類学会
- ⑦黒住耐二二〇一一「馬場遺跡第5地点(第1次)の土坑内土壌から得られた貝類遺体」『印旛都市文化財センター発掘調査報告書』二九五印西市
- ⑧増田修一九九四「カワシンジュガイ」『日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料』水産庁・日本水産資源保護協会
- ⑨忍澤成視二〇一一「貝の考古学」同成社

珠母貝が考えられ、湖沼に面した貝塚は別として、先史時代貝塚出土個体の多くは食用ではなかった可能性も高いと考え

奈良・平安時代の漁網錘

—ひたちなか市出土土錘の類型について—

佐々木 義則



大型管状土錘と球状土錘Ⅱ類

ひたちなか市から出土する奈良・平安時代の土錘は、大型管状土錘、管状土錘、球状土錘に分類されます。大型管状土錘や管状土錘Ⅰ類・球状土錘Ⅰ類は曳網用の沈子と考えられ、とくに大型管状土錘は鮭地曳網用の可能性があります。また球状土錘Ⅱ・Ⅲ類は刺網用と推定されますが、平安時代になると小型のⅢ類が多くなります。それは集落構造の変化と関わるものかもしれません。

1 はじめに

ひたちなか市は、東は太平洋、南は那珂川に面し、そうした海浜・河川域では古くから多様な漁撈活動が営まれてきたものと考えられる。こうした漁撈に関わる遺物として漁網錘と推定される土錘がある。本稿では、ひたちなか市から出土した奈良・平安時代の土錘研究の第一歩として、その分類の様相をみてみたいと思う。

2 刺網のこと

古代の土錘は、全国の海浜・湖沼・河川域の遺跡から多量に出土しており、民俗例からみて漁網錘として理解される遺物である。漁網は江戸時代以後の発達により、多種類の網が生み出されてきた。しかし古代においては、網をつくりあげる麻糸は貴重であり、大規模な網を所有することは困難であった。したがって古代における漁網は、中・小型の魚類を対象とした丈の短い刺網が一般的に用いられていたものと考えられている。一大沼二〇一二。刺網は、上部の綱（つな）に浮子（あば）を結びつけ、下部の綱（つな）に沈子（いわ）を通し、その間に網地（あみじ）をつけて構成される（図1）。

刺網で漁獲をあげるには、網の張りが強すぎても弱すぎてもだめであり、魚に違和感を与えない程度のバランスで水中に自立させる必要がある。一大沼二〇一二。このように、土錘は用いる網の規模に適した重さを持っていた。つまり土錘の重量は網の規模を示す可能性がある。

3 土錘の分類

ひたちなか市から出土した土錘の類型を考えるために、茨城県内から出土した奈良・平安時代における土錘を分類してみた。土錘の分類にあたっては、住居跡から出土した土錘群の多量出土事例に注目した。まず土錘を形状によつて球状土錘・管状土錘・細形管状土錘に分け、次に各土錘群について長さ（大きさ）と重量の分布域を調べた。そして、そうした各土錘群の分布域を示した図2をもとに、類型の設定を試みた。

さて、図2をみると、各形状の土錘は重量の違いによつて、球状土錘がⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に、管状土錘が大型およびⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に、細形管状土錘がⅠ・Ⅱ類に分類でき、現状では、茨城県内出土奈良・平安時代土錘は一一種類に分類された。また、土錘の重量の違いが漁網の規模と関係するならば、以上の分類は、用いられた漁

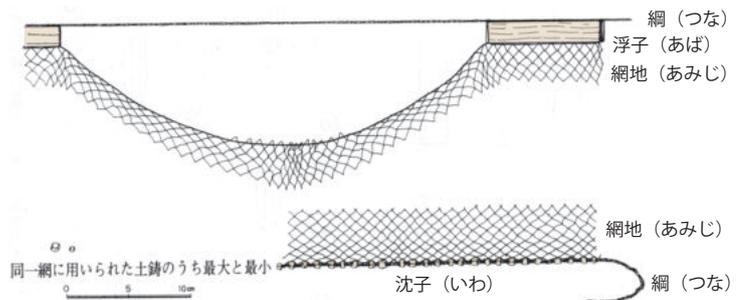
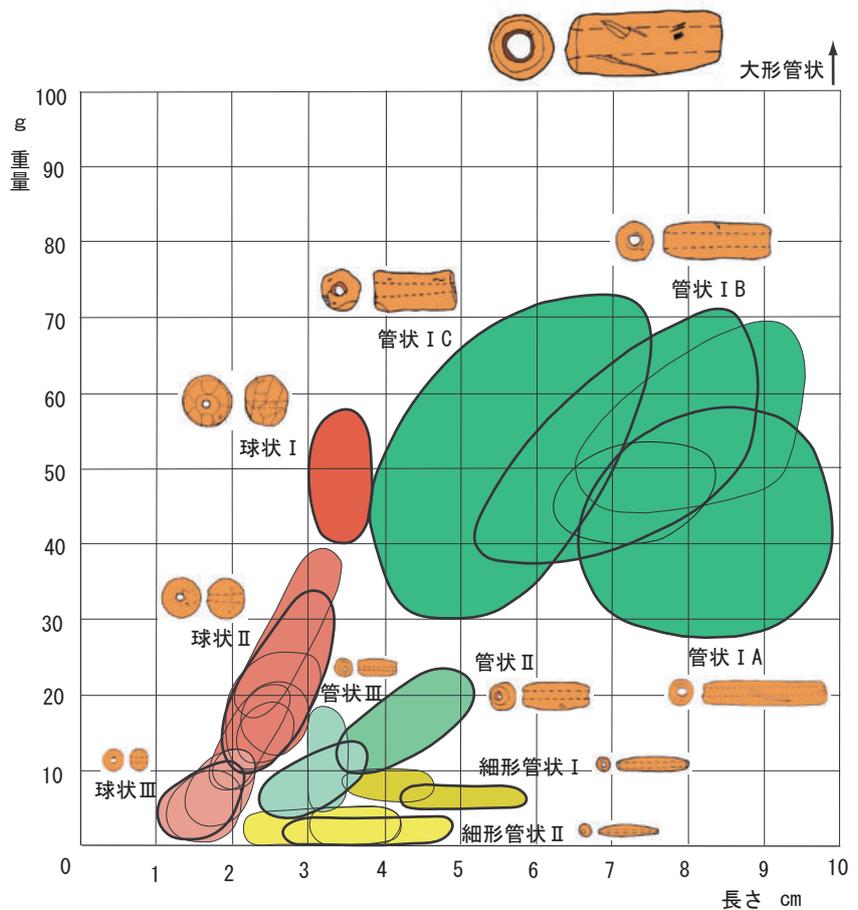


図1 刺網（大沼1992文献より引用、改変）



基準資料	大形管状	管状 I A類	管状 I B類	管状 I C類	管状 II類	管状 III類	細形管状 I類	細形管状 II類	球状 I類	球状 II類	球状 III類
	：ひたちなか市三反田下高井遺跡204号住居跡 (7世紀後半)	：行方市木工台41号住居跡 (8世紀前半)	：土浦市うぐいす平遺跡8号住居跡 (8世紀後半)	：茨城町宮ヶ崎城跡6号住居跡 (8世紀後半)	：結城市下り松遺跡28号住居跡 (11世紀後半)	：つくば市熊の山遺跡205号住居跡 (11世紀前半)	：城里町藤前5号住居跡 (9世紀前半)	：城里町藤前41号住居跡 (9世紀後半)	：稲敷市薬師後遺跡221号住居跡 (8世紀前半)	：稲敷市薬師後遺跡116号住居跡 (8世紀前半)	：行方市木工台遺跡79号住居跡 (10世紀後半)

図2 茨城県内から出土した土錘の分類

(線で囲んだ範囲は多量出土事例ごとの分布域を示す。太線が基準資料。土錘の図は発掘調査報告書より引用、改変。縮尺1/6)

網の規模を反映する可能性があるとと思われる。なお管状土錘I類は、形状の違いによりA・B・C類にさらに分類されたが、それぞれの基準資料となる遺跡の位置が離れていることを考慮すると、こうした形状の違いは土錘の地域色を示しているのかもしれない。

4 ひたちなか市出土の奈良・平安時代土錘

ひたちなか市においては、古墳時代前期以後から土錘が出土するようになる。古墳時代にす

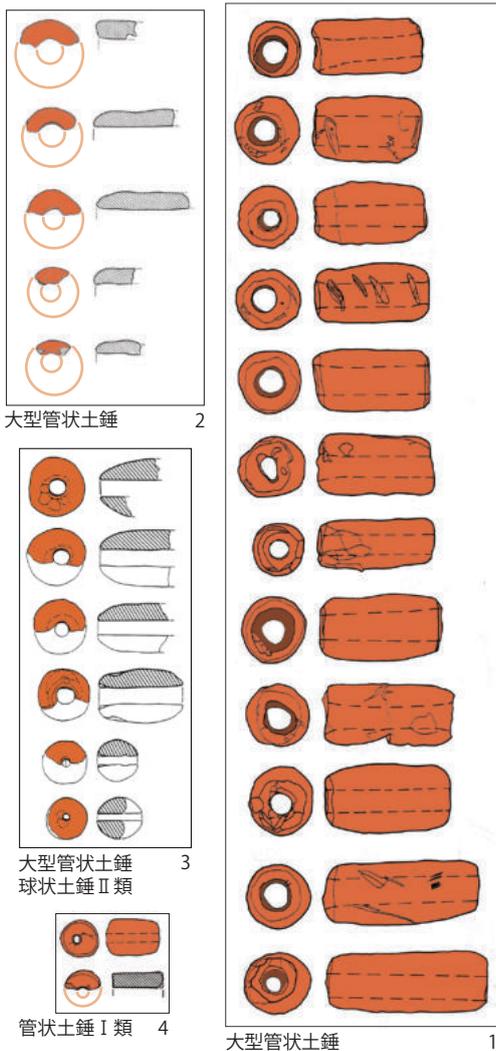
でに球状土錘と管状土錘がともに用いられていることからみて、奈良時代は古墳時代後期の網漁を継承しているように思える。次に、市内出土の奈良・平安時代土錘を、先の分類に基づきながらながめてみよう。

大型管状土錘

大型管状土錘は那珂川下流域を特徴づける土錘である。船窪遺跡一〇A・五三号住居跡(八世紀前半、図5・2)、一一A・四七B号住居跡(八世紀後半)、半分山遺

跡三七A号住居跡(八世紀後半)、三反田下高井遺跡二〇四号住居跡(七世紀末頃、図5・1)、一五八B・一九九・二二八号住居跡(八世紀後半)、一九八B号住居跡(一〇世紀後半)、武田石高遺跡四八号住居跡(八世紀前半図5・3)、武田原前遺跡四六A号住居跡(九世紀後半)から出土している。年代的には八世紀の資料が目立っており、奈良時代には確実に使用されていたといえる。九・一〇世紀のものは、それぞれ一点ずつの出土であるから、他時代の資料が混入した可能性も考えられる。

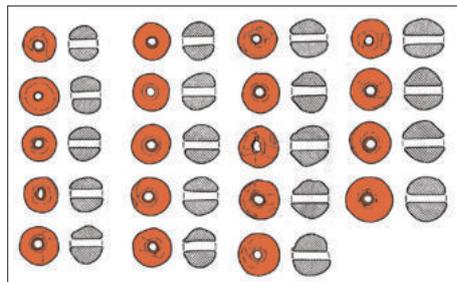
七世紀末に位置付けられる三反田下高井遺跡二〇四号住居跡からは、多量の大型管状土錘が出土している。長さ八〜一三cm、重量一五〇〜三六〇gを測り(図4)、他の種類の土錘と比べると隔絶した重量をもっている。おそらく、刺網用では重すぎると考えられるため、曳網用とするのが妥当であろう。民俗例をみると、愛知県の木曾川で用いられていた、サツキマス(サツキマス)の地曳網が参考になる「久保一九九六」。この地曳網には一〇〇g以上の漁網錘(陶錘)がつけられていた。サツキマスの体長は三〇〜五〇cmである。ひたちなか市出土の大型管状土錘の重さを考えると、対象としていた魚はサツキマスより大きかったのではないかと思われる。那珂川下流域で該当する魚では、やはり鮭が候補に挙がる「白石・さかい一九九五」。那珂川河口では、昭和三十七年まで鮭地曳網漁がおこなわれ



大型管状土錘

大型管状土錘
球状土錘Ⅱ類

管状土錘Ⅰ類



球状土錘Ⅱ類

球状土錘Ⅲ類

- 1 三反田下高井遺跡 204 号住居跡 (7 世紀末)
- 2 船窪遺跡 10A 号住居跡 (8 世紀前半)
- 3 武田石高遺跡 48 号住居跡 (8 世紀前半)
- 4 上: 三反田下高井遺跡 70 号住居跡 (9 世紀前半)
下: 船窪遺跡 21 号住居跡 (9 世紀中頃)
- 5 半分山遺跡 55 号住居跡 (8 世紀後半)
- 6 武田西塙遺跡 84A 号住居跡 (10 世紀末)

図 5 ひたちなか市から出土した土錘

(土錘の図は発掘調査報告書より引用, 改変)

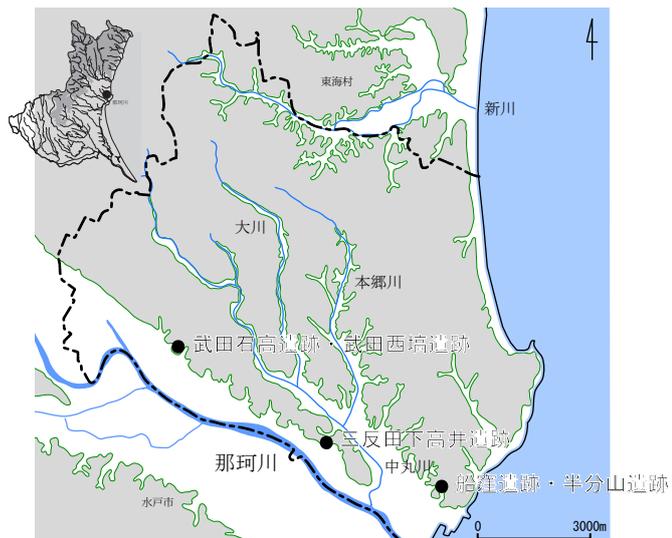


図 3 遺跡の位置

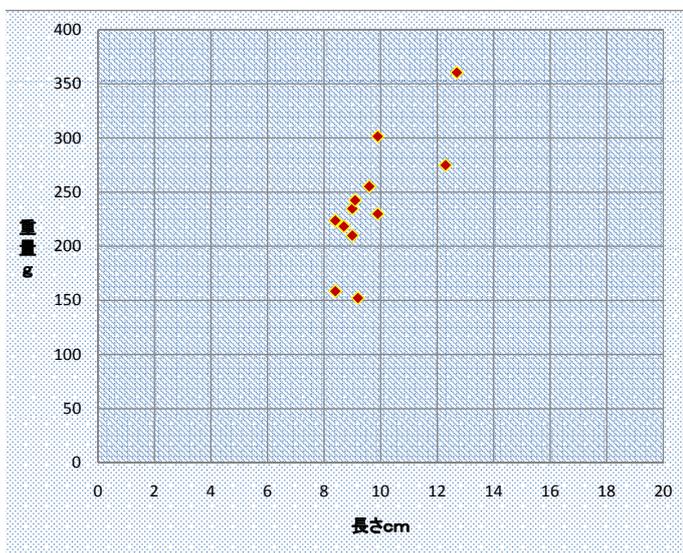


図 4 三反田下高井遺跡 204 号住居跡出土土錘の長さ重量

ていたが、その起源は明らかではないという「亀山一九七五」(図 6)。古墳時代中期末の武田西塙遺跡^{しほなわ}二六七号住居跡からも大型管状土錘が出土しており、これが鮭地曳網用であるとすれば、今から一五〇〇年も前の古墳時代中期ごろまで、那珂川下流における鮭漁の伝統がいつきにさかのぼることになる。当地域の漁撈史を考える上で、大型管状土錘は最も注目すべき土錘であるといえよう。

管状土錘Ⅰ・Ⅱ類 管状土錘Ⅰ・Ⅱ類は、船窪遺跡四八号住居跡(Ⅰ類、八世紀後半)、二一号住居跡(Ⅰ類、九世紀前半、図 5・4 下)、半分山遺跡粘土採掘坑(Ⅱ類、八世紀後半)、三反田下高井遺跡七〇号住居跡(Ⅰ類、九世紀前半、図 5・4 上)から出土し、八世紀後半から九世紀前半にかけてみることができる。使用

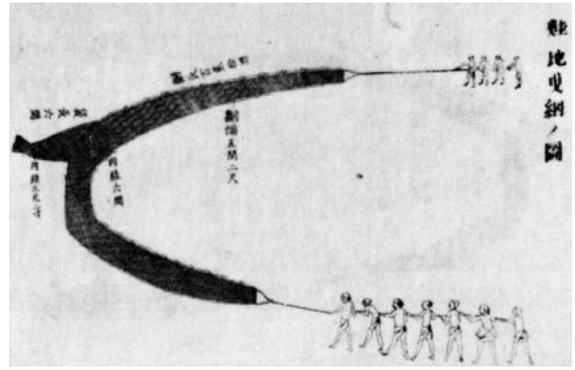


図6 那珂川の鮭曳網

『茨城県河川沼漁略図并収穫調書』明治13年掲載の図。『写真集那珂湊市史』122頁より引用)

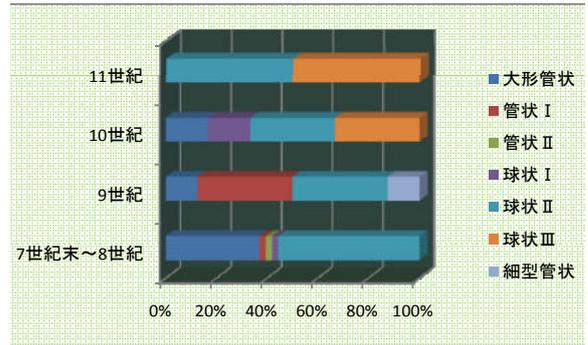


図7 ひたちなか市出土土錘の時期別構成

された漁網の推定は難しいが、滋賀県川並では、コイの曳網に六〇gほどの錘を用いている一閃一九九〇一ことを参考にすれば、管状土錘Ⅰ類は曳網用の錘とみるのがよいのかもしれない。なお管状土錘Ⅱ類は後述する球状土錘Ⅱ類と同様の重量であることから、刺網用と考えたい。

球状土錘 球状土錘は、半分山遺跡五五号住居跡（八世紀後半、図5・5）から多量に出土しており、当地域において各時代を通して最も出土量の多い土錘である。ひたちなか市出土土錘の時期別構成（図7）をみると、球状土錘Ⅱ類が各時期とも一定量出土しており、球状土錘Ⅱ類を用いた漁網が那珂川下流域で最も一般的であった。球状土錘Ⅱ類は重量からみて、おそらく曳網用ではなく、より小規模な操業にも対

地でも認められる。

土錘の重さと漁網の規模が関わるならば、この現象は漁網の小規模化と捉えることができる。

球状土錘Ⅲ類が一般化してくる九・一〇世紀頃、県内の平安時代集落では、「班田集落」から「名田集落」へという集落構造の変化が生じている（佐々木二〇一〇）。集落構造の変化による単位集団の小規模化は、漁撈従事者の少人数化をもたらし、それに合わせた漁撈形態が求められた結果、漁網の小規模化という現象が生じたものと想像している。那珂川流域の漁撈を考える際には、このように集落との関係を窺うことも重要なのである。

5 おわりに

『勝田市史』や『那珂湊市史』には、古代・

応できた、刺網の錘であった可能性が高いように思える。なお、少量出土する球状土錘Ⅰ類は、管状土錘Ⅰ類と重量が同じであることから、曳網用の錘になるのかもしれない。

ところで一〇世紀以後になると、より小型の球状土錘Ⅲ類（図5・6）が一定量みられるようになる。平安時代に入ってから小型の球状土錘が増加する現象は、茨城県内各

中世の漁撈生活についての記述は少ない。当地域における漁撈伝統のルーツ解明に向けて、まずは土錘という考古資料を十分に活用することが必要である。深くて広い古代漁撈活動の世界にむけて、これから舟を漕ぎだしてみようと思う。

なお本稿をなすにあたり、藤本武氏・矢野徳也氏・鈴木素行氏・稲田健一氏から御指導および文献の御配慮をいただいた。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 亀山慶二一九七五「那珂川と漁業」『勝田市史民俗編勝田市／関雅之二九九〇「古代細型管状土錘考」『北越考古学』第三号、北越考古学研究会／大沼芳幸一九九二「人はそれでもタンパクシツを欲した」『紀要』第五号、滋賀県文化財保護協会／白石真理・さかいひろこ一九九五「TAKEDA REPORT 95」『フィールドノート』8、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社／久保禎子一九九六「民俗探訪（七） 木曾川の大網」『博物館だより』No.二、一宮市博物館／田辺悟二〇〇二「もの」と人間の文化史二〇六「網」法政大学出版局／稲田健二二〇〇七「茨城県の概要」『古墳時代の海人集団を再検討する』埋蔵文化財研究会／佐々木義則二〇一〇「武田遺跡群からみた奈良・平安時代の集落」『武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社／大沼芳幸二〇二二「古代近江における職能漁民の動向」『紀要』第二五号、滋賀県文化財保護協会

文 埋 センターの 日々 2012 後期

10月

6 ふるさと考古学⑦「土の考古学」
(講師・田村憲司氏) ↓



11 二日赤城分団見学／遺物鑑定 ↓



13 ふるさと考古学⑧「石の考古学」
(講師・柴田徹氏) ／ 14 日立歴史
研究会見学 ／ 16-19 大房地遺跡試
掘調査 ／ 24 ジョウビタキ飛来 ↓



25 中根小学校2年生社会科見学
／ 28 大平自治会見学 ／ 31 『埋文
だより』第37号発行

11月

1 一中コミセン見学／阿字ヶ浦小
学校6年生社会科見学／中央公
民館ふるさとの歴史散策見学／
14 虎塚古墳一般公開 ／ 3 茨城大
学人文学部見学 ／ 4 ふるさと考古
学⑨「壁画の考古学」(講師・堀江武
史氏) ／ 東京都目黒区歴史を楽し
む会見学／毎日新聞ツアー見学／
7 8 佐野中学校2年生職場体験 ↓



7 9 島ノ原遺跡・東石川新堀試掘
調査 ／ 8 柏シルバー大学院見学／
毎日新聞旅行見学／三反田小学
校6年生社会科見学 ↓



8 11 虎塚古墳一般公開 ／ 10 ふる

さと考古学⑩「骨の考古学」(講師・
小宮孟氏) ／ 11 ワンケースミュ
ージアム25「古墳時代の色」終了／
12 ふるさと考古学⑪「フィールド
探検」(講師・矢野徳也氏) ↓



20 勝田第三中学校2年生職場体
験 ↓



22-29 市毛上坪遺跡・東石川内後
試掘調査 ／ 25 西中根自治会歩
く会見学

12月

1 ワンケースミュージアム26「鷹ノ巣
遺跡発掘調査速報展」開始／早野浩
二氏(愛知県埋蔵文化財センター)資料見学(武
田石高遺跡土師器) ／ 2 ふるさと考古学
⑫「やっぱり楽しい考古学」(講師・さ
かいひろこ氏) ／ 5 佐野公民館見学
／ 7 茨城県立歴史館より資料返却
(沢田遺跡土器ほか) ／ 11 東石川小学



10 ムサシアブミ

今年の干支は「巳」です。とくじくじ、一〇番目の花
は「ムサシアブミ」をご紹介します。

ムサシアブミはサトイモ科テンナンショウ属の多年草で
す。名前は、仏炎苞(水芭蕉の白い部分)が武蔵国でつく
られた鎧(馬に乗る際に足をかける道具)に似ていること
から、そう名付けられました。葉は二枚、広い葉が向かい
合って生え、小葉が三枚つきます。その高さは一〇〜三〇
cm位になります。花はその二枚の葉の間にあり、三月から
五月頃に咲きます。

虎塚古墳の森では、夏場にかのりの確率で「今年の干支」
に遭遇します。ですので、私は藪の中のこの花に出会うこ
いつもドキッとさせられています。(稲田健一)



2011.5.8

5年生社会科見学／12-14 岡田遺跡
 跡試掘調査／14 自衛隊OB会見
 学／18-19 三反田蛭塚遺跡試掘調査
 査／27 浅間縄文ミュージアムより資料返却(後野遺跡細石刃ほか)

1月

5谷畑圭祐氏資料寄贈(東石川遺跡縄文土器ほか)／17 十五郎穴横穴墓群試掘調査開始



16 金上豊寿会見学／19 ワンケーミュージアム26終了／23 太田博樹氏(北里大学)人骨DNA鑑定資料採取(十五郎穴横穴墓群館出支群35号墓)



23-25 磯崎東古墳群試掘調査／23-30 老ノ塚遺跡試掘調査／26 茨城県北ジオパーク会議／31 池上保久氏資料寄贈(東原遺跡土師器ほか)

2 ひたちなか市の考古学第6回①
 「群馬県域「樽式」の土器と社会」
 (講師・若狭徹氏)／第10回企画展「旅する「十王台式」—弥生時代
 終末の久慈川・那珂川流域—」開
 始／群馬県NHK文化センター見
 学／5 ひたちなか市の考古学第
 6回②「茨城県域「十王台式」の土
 器と社会」(講師・鈴木素行)／
 13 三反田蛭塚遺跡本調査開始／
 20 柴田遺跡試掘調査開始／21 ひ
 たちなか市史跡保存対策委員会／
 23 ひたちなか市の考古学第6回
 ③「栃木県域「二軒屋式」の土器と
 社会」(講師・藤田典夫氏)／26
 雷遺跡試掘調査開始



28 飛田英世氏資料寄贈(小鍋沢遺跡縄文土器)



3月

2 橋本勝雄氏資料寄贈(種刃器模造品ほか)
 3 ひたちなか市の考古学第6回④
 「弥生時代後期の関東地方」(講師・
 石川日出志氏)／4 柴田遺跡試掘
 調査終了／5 三反田蛭塚遺跡本調
 査終了／9 雷遺跡試掘調査終了／
 12 平成24年度ひたちなか市内遺跡
 発掘調査報告書」発行／15 鷹ノ巣
 II(公社報告第41巻)発行／15 郎穴横
 穴墓群試掘調査終了／19-22 高野
 富士山遺跡・岡田遺跡試掘調査／
 29-31 虎塚古墳一般公開／31 埋文
 だより」第38号発行



入館者状況 (2012.10.1～2013.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	26	186	6(1)	163(18)	349	
11月	26	949	15(5)	532(92)	1481	
12月	23	87	5(1)	99(4)	186	
1月	23	120	2(0)	50(0)	170	
2月	24	135	4(0)	152(0)	287	
3月	26	604	1(0)	40(0)	644	
合計	148	2081	33(7)	1036(114)	3117	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は「ひたちなか市報」及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の 笑う埴輪

今年度は公開講座と企画展を担当した。「白亜紀の海と空」という、化石の講座と展示も検討したのだが、これは実現が難しく幻に終わった。コーディネートに専念しようという目論見が潰れて、なげなしの弥生時代後期に題材を求めることになった。展示のタイトルは「旅する「十王台式」としたものの、「十王台式」が辿り着いた先の群馬県や千葉県から遺物を借用することは無理。茨城県内の資料だけで旅の雰囲気を出さなければならぬ。とりあえず見切り発車で、観察したい資料を借用し集めてみる。実測しながらの観察の記録が、展示パネルの原稿となった。壁面のケースにパネルを貼り付けてみると、並べた土器が邪魔をしてパネルが読めない。パネルをとるか土器をとるか、必要もないのに悩む。土器を並べて当たり前、パネルは背景を装飾する壁紙くらいの感覚で観ていただきたい。黒板にチョークで書きなぐった計算式とは良く喩え過ぎか。

壁面ケースには、縦に二、三段で土器が並ぶ。企画展が終了するまで、強い地震がないことを、ひたすら祈り続けなければならぬ。



(2013.1.31)



ひたちなか埋文だより 第38号

編集 財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

2013年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター